

ロシア帝国の外交史料をめぐって

中 見 立 夫

近年、歴史学をめぐる研究環境は激変し、それとともに、あらたな成果がつつぎと現れている。東アジア史研究の場合、関係諸国の「対外開放」あるいは「民主化」が進み、歴史評価の変動、あらたな研究動向がおこり、さらに新史料の発掘と文書史料の公開も促進されている。いまや18世紀以降の東アジア史研究においては、文書史料を活用することなくしては、なにも論文が書けない状況にまで到達している。一方、外交史研究においては、これより早く、主要各国の外交史料の組織的マイクロ化が進行していたが、日本人研究者にとっては、70年代以後、日本の経済力の向上と学界における「国際化」志向のたかまりのなかで、以前とはくらべられないほど容易に、海外での調査・研究ができる状態となった。ところが、ことロシアと東アジア地域との関係史研究、あるいは東アジア史研究におけるロシア側史料の活用、またロシア史研究者からの東アジア史研究への発言などは、いたってとほしい。その理由は多々あげることができようが、このような現状は、なんとしても改善しなければならない。近代世界において東アジア地域と関わりをもった欧米列強のなかでも、地理的隣接性をあげるまでもなく、ロシアはもっとも重要な国家のひとつであった。ロシア側史料、ロシアに保存される東アジア関係史料、そしてロシア学界での研究動向、ロシア学者との共同研究、さらには東アジア史研究者とロシア史研究者間の交流へも、もっと目を向けなければならない。

筆者は、昨94年度より、国際交流基金、文部省国際学術研究費などの助成をいただき、数次にわたり、ロシア外務省の文書館を中心に、ロシアの東アジア外交関係史料を調査する機会にめぐまれた。もとより限られた知見であり、またロシア史専門家でもないため、初歩的な誤りもある

ろう。だが不十分なものと承知しつつ、史料情報として本稿をまとめてみた。ロシアの東アジア外交のなかでも、筆者の研究関心は、前世紀末から今世紀初頭にかけてのモンゴル、中国東北地域をめぐらる問題にあるので、その方面の史料を例として追いながら、ロシア外交史料の出版状況、そしてロシア外務省の文書館における史料保存と公開の現状を御紹介したい。

I. 刊行史料

ロシアについてソヴィエトに対しては、外交史料の非公開性がよくいわれたが、ロシア帝国、ソヴィエト連邦においても、それなりにロシア帝国時代の外交史料は公刊されていた。問題は、その質である。ロシア帝国に関する刊行外交史料については、トスカノ氏による世界の外交史料研究¹⁾でもふれられており、また日清戦争期を中心としたものではあるが、佐々木揚氏の近代露清関係に関する、すぐれた紹介論文²⁾もある。佐々木氏の論文との重複をさけ、ごく簡単にふれば、単発の文書集は別として、おおきな流れとしては、以下の順序で外交文書の出版がおこなわれた。

1. “オレンジ・ブック”と『外務省通報』

「外交史料の問題は、国内政治の民主化の過程、歴史的には議会制度の発展の過程と結びついている」³⁾が、ロシア帝国において、いわゆる“colored books”つまり政府の外交文書が刊行されるようになったのは、1905年の国会開設が近づいたころである。それは、表紙の色にちなんで“オレンジ・ブック”ないしは“橙書”といわれるが、実際に全部で何種類・何冊出されたのかはよくわからない。“オレンジ・ブック”は、発表に際して、すべてではないにせよ、ロシア側に都合のよいように、文書の改竄がおこなわれていることでも有名である。ついで1912年より『外務省通報/Известия Министерства иностранных дел』が発行されるようになった。この『外務省通報』に関しては、チルコワ (E. A. Чиркова) 氏による、同誌掲載重要史料目録つき紹介論文⁴⁾がある。一般に、日本では前者にくらべ、『外務省通報』は注目されることがないようだが、おおむね毎号「1. ロシアが締結した国際条約」、「2. ロシ

アの立法」、「3. 外国間条約」、「4. 外交文書」、「5. 領事報告」、「6. 非公式欄」の6項目および書評欄と政治事件日誌からなる。興味ふかいは「6. 非公式欄」の存在であり、たとえば1860年代の露清交渉で有名なイグナーチエフ (Н. П. Игнатъев) の個人史料なども連載されている。本誌も表紙はオレンジ色であり、たとえば1914年第2冊巻末付録にある「モンゴル問題外交文書集/Сборник дипломатических документов по Монгольскому вопросу (23 августа 1912г. — 2 ноября 1913г.)」が、それだけでも“オレンジ・ブック”として刊行されていることから、両者の関係がわかる。

2. 『クラスヌイ・アルヒーフ』

ロシア革命によって、社会主義政権が誕生すると、帝国主義国家間の「秘密外交」の告発をはじめた。幾多の秘密外交文書がソヴィエトにより公表されたが、体系的な出版としては、『クラスヌイ・アルヒーフ/Красный архив』誌上でまずおこなわれた。本誌は、ソ連邦中央文書局が編集した「未刊行史料の掲載を主目的とする雑誌」で、指導したのは中央文書局長であったポクロフスキー (М. Н. Покровский) であったが、「17世紀頃からロシア革命、内戦期に至るまでの時期の、政治史、外交史、革命運動史さらに文学史等の分野にわたる、公文書、書簡、日記といった根本史料が整理・編纂を経た上で掲載された」⁵⁾。1922年に刊行をはじめ、1941年の第106冊で終刊をむかえた。本誌で紹介された外交史料は、その雑誌の性格上、年代別ではなく、主題ごとに掲載されている。本誌掲載外交史料のうち、19世紀末のロシア・中国関係文書については、佐々木揚氏の御努力による日本語編訳が『19世紀末におけるロシアと中国——『クラスヌイ・アルヒーフ』所収史料より』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所および巖南堂書店、平成5年)として出版されているが、その「序論」で本誌の性格、紹介された外交史料の意義、関連史料と研究などが詳しく論じられているので、参照されたい。なお、本誌は全巻の復刻版があり、また解説付総目録も、アメリカ、ソ連(およびその復刻)で出版されており、さらに戦前から、一部掲載史料の英語、中国語訳などもあるため、比較的良好に研究者に存在が知られている。モンゴル問題に関しては、1929年の第6冊所収の「帝政ロシアとモンゴル」⁶⁾のなかで、1913年11月から14年1月にかけて

の関係外交文書が公表されているが、これは、明白に前記「モンゴル問題外交文書集」の継続として刊行されたものである。

3. 『帝国主義時代の国際関係』

前記『クラスヌイ・アルヒーフ』は主題別史料雑誌であるが、ソヴィエト政権が本格的に編集した、1878年のベルリン会議以降を対象とした、ロシア帝国および2月革命による臨時政府時期の外交文書集が、『帝国主義時代の国際関係/Международные отношения в эпоху империализма: документы из архивов царского и временного правительств, 1878 ~ 1917 гг. (Москва-Ленинград: Государственное социально-экономическое издательство, 1931-1940)』である。本書の編集責任者もポクロフスキーであるが、さらにドイツのロシア史家、ヘッチュ (Otto Hoetzsch) を代表とする「ドイツ東ヨーロッパ研究協会」とのあいだに史料提供の協定がむすばれ、ベルリンでドイツ語翻訳版 (*Die Internationalen Beziehungen im Zeitalter des Imperialismus, Dokumente aus den Archiven der Zarischen und der Provisorischen Regierung*) が刊行されることとなった。このドイツ語版にもとづく、『帝国主義時代の国際関係』のいわば外交史料学的研究、および歴史家としてのポクロフスキーについては、三宅正樹氏のすぐれた論考⁷⁾がある。

『帝国主義時代の国際関係』のロシア語原版およびドイツ語翻訳版は、結局、第二次世界大戦のために、ともに予定された全巻を刊行することなく終わった。また、独ソ戦勃発以前にロシア語原稿がドイツに提供された事情もあり、独ソ間が音信不可能となったあと、ロシア語原版は出ているが、ドイツ語翻訳版は刊行されなかった巻がある一方、逆のケース、つまりドイツ語翻訳版が出版されていても、ロシア語原版は未刊に終わった巻もある。ロシア語原版とドイツ語翻訳版の刊行分一覧は表1を参照されたい。

『帝国主義時代の国際関係』はロシア語原版、ドイツ語翻訳版、ともに内容は同一であり、まず「文書一覧」があり、原件(官庁)符号および原件所収のファイル番号も明示されている。ちなみに『日本外交文書』では、収録文書にそれがどのファイルに所収されているか注記がないため、外務省記録で原件がどこにファイルされているか、さがし出す

表1: 『帝国主義時代の国際関係』ロシア語原版・ドイツ語翻訳版刊行分一覧

シリーズ	巻数	分冊数	収録文書の時期	露版刊行年度	独版刊行年度	備考
II / 独版 では III / 21	18	1	1911.V.14.~IX.13.	1938	1939	
		2	1911.IX.14.~XI.13.	1938	1940	
	19	1	1911.XI.14.~1912.I.13.	1938	1941	
		2	1912.I.14.~V.13.	1938	1943	
	20	1	1912.V.14.~VIII.13.	1939	未刊	
2		1912.VIII.14.~X.17.	1940	未刊	独版は未刊行	
21	1	1912.X.18.~XII.4.	未刊	1942	露版は未刊行	
III / 独版 では 5巻 まで I。 6巻 以降 II / 7 2 8 2 9 10	1	1	1914.I.14.~III.13.	1931	1931	明らかに独版 が露版より先 に刊行された 明らかに独版 が露版より先 に刊行された
			1914.III.14.~V.13.	1933	1933	
			1914.V.14.~VI.27.	1933	1933	
			1914.VI.28.~VI.27.	1931	1932	
			1914.VII.23.~VIII.4.	1934	1934	
			1914.VIII.5.~XI.1.	1935	1934	
	2	2	1914.XI.2.~1915.I.13.	1935	1934	
			1915.I.14.~III.23.	1935	1935	
	8	2	1915.III.24.~V.23.	1935	1935	
			1915.V.24.~VIII.4.	1935	1936	
9	2	1915.VIII.5.~X.16.	1935	1936		
		1915.X.17.~1916.I.13.	1937	未刊	独版は未刊行	
10	1	1916.I.14.~IV.13.	1937	未刊	独版は未刊行	

のが困難である。つぎに収録されている各文書については、その文書がすでに外国の外交史料集をふくめ発表されている場合には脚注があり、また本書に未収録の文書でも、関連する重要文書は注として一部引用ないしは要約が、原件符号、ファイル番号もあげて、紹介されている。原件が英・仏語の場合も、原文および露訳がつけられている。巻末には、人名索引、国家・地域別発信・受信者索引、さらにはかなり細かい事項別索引も付されており、世界各国の外交文書集と比較しても、きわめて高い水準の業績であり、『日本外交文書』などはとてもこれにおよばない。編集責任者であるポクロフスキーの見識が反映されているといえよう。ちなみに、日本では本書が稀覯書のごとくおもわれているようだが、ロシア語版は外務省図書館、一橋大学経済研究所、北海道大学図書館をは

じめ部分的に所蔵されている。日本の図書館未所蔵分は筆者がヘルシンキ大学図書館よりマイクロでとりよせてあるが、近年、故入江啓四郎教授の旧蔵書が早稲田大学図書館に寄贈され、このなかにかなりまとまった巻数がふくまれている。いずれにせよ、現在は日本で全巻を閲覧することが可能である。またドイツ語版も神奈川大学図書館に相当の巻数が保管されているほか、一部を所蔵する図書館がある。神奈川大学図書館蔵本は、三宅教授の御尽力により、ドイツ連邦外務省より贈呈されたもので、筆者の記憶にまちがえなければ、ナチ党ペイルート支部の蔵書印が押されていたとおもう。

なお、『帝国主義時代の国際関係』収録文書のうち一部分は、戦前、外務省調査部、東亜研究所により日本語訳されており、また戦後も内閣調査室の外郭団体である民主主義研究会によって、資料集（ただし戦前訳を利用したのか、あらたに訳出したのかよくわからない）が刊行されている。また中国では、全巻ではないが、かなりの巻数分が中国語訳され、内部資料として配布されている。さらに、たとえばモンゴル関係文書のうち一部は、前記「モンゴル問題外交文書集」および『クラスヌィ・アルヒーフ』所収文書の一部も加えて、陳春華訳『俄国外交文書選訳——関于蒙古問題』（哈爾濱：黒龍江教育出版社、1991年）として出版されている。ただし、中国語訳の場合、中国語の性質もあって、ロシア語原文の微妙なニュアンスがうまく訳出されていないことが多いので、十分に注意を要する。

4. 『19世紀および20世紀初頭のロシアの対外政策』

結局、未完結に終わった『帝国主義時代の国際関係』に替わって、戦後にソ連邦外務省外交文書出版委員会（委員長は、当時外務大臣であったグロムイコ）の手で、1960年より、あらたに『19世紀および20世紀初頭のロシアの対外政策/Внешняя политика России XIX и начала XX века : документы Российского министерства иностранных дел』が刊行されることとなった。現在まで、出版された部分は、表2のとおりである。

しかし、第2シリーズ（1815～1830年）途中まで出版されたところで、ソ連邦崩壊をむかえ、今後、本書が継続刊行されるかどうか、危惧されていた。さらに、いまや外交史料も外国人に対して大幅に公開されるよ

表2：『19世紀および20世紀初頭のロシアの対外政策』既刊分一覧

シリーズ	巻数(通巻数)	収録文書の時期	刊行年度	頁数
1	1	1801年 3月～1804年 4月	1960	800
	2	1804年 4月～1805年12月	1961	744
	3	1805年 1月～1807年 7月	1963	840
	4	1807年 7月～1809年 3月	1965	783
	5	1809年 4月～1811年 1月	1967	784
	6	1811年 1月～1812年12月	1962	866
	7	1813年 1月～1814年 5月	1970	872
	8	1814年 5月～1815年11月	1972	759
2	1(9)	1815年11月～1817年 9月	1974	821
	2(10)	1817年10月～1819年 4月	1976	902
	3(11)	1819年 5月～1821年 2月	1979	879
	4(12)	1821年 3月～1822年12月	1980	783
	5(13)	1823年 1月～1824年12月	1982	832
	6(14)	1825年 1月～1826年12月	1985	928
	7(15)	1827年 1月～1828年10月	1992	781
	8(16)	1828年10月～1830年 7月	1995	708

うになったので、本書の意義も相対的には低下している。ただし、外務省文書館で外交文書をさがす際の目安ともなるし、また既刊分の時期については、まだ手書き文書が圧倒的多数とおもわれるので、活字印刷本である本書は、利用者にとって依然少なからぬ価値があろう。ただし、中国関係文書に関しては、編集に疑義がもたれていることも事実である⁸⁾。

さて、最後に筆者が関心をもつ、モンゴル関係ロシア外交文書を例として、上記既刊文書集を活用すると、どの年代範囲が参照可能か図示すると、表3のようになる。

表3：既刊外交文書集でモンゴル問題の場合、どの程度年代的に追えるか。

“オレンジ・ブック”	1912.IX.5.←→1913.XI.15.
【クラスヌィ・アルヒーフ】	1913.XI.1.←→1914.I.30.
【帝国主義時代の国際関係】露語版	1911.V.←→1912.X. 1914.I.←→1916.IV.
【帝国主義時代の国際関係】独語版	+→1912.XII.

モンゴル問題が、ほかの案件にも当てはまるとは決していえないが、既刊外交文書集を丹念に追えば、こと1910年代に関しては、かなりの部分まで主要文書は公表されていることが指摘できる。したがって、日本の一部で安易にいわれるような、ロシアそしてソ連は、外交文書を隠していた、などという事実は必ずしも正確ではないのである。中国においては、この年代は、まさに辛亥革命の時期と重なる。ところが、日本の中国史関係者で、辛亥革命研究との関連で、『帝国主義時代の国際関係』を史料として着目したのは、わずかに故入江氏ぐらいである⁹⁾。

なお、いままでしるした外交文書集とは別に、おもに19世紀以前の時期については、たとえば17・18世紀の『ロシア・中国関係史料集』、『17世紀ロシア・モンゴル関係史料集』などのように、国あるいは地域ごとの外交史料集があり、またロシア帝国時期全般についても、『露中関係主要文書集』といったような条約集も多く出版されている。

II. ロシア帝国外交アルヒーフ所蔵外交文書

ロシアの外交、そして現地に所蔵される史料に関心をいだくものとして、一度はロシアの文書館¹⁰⁾で研究をおこないたいとの夢があった。東アジア関係ロシア外交文書をふんだんに利用した著作としては、グリゴールツェヴィチ (С. С. Григорцевич) 氏の『帝国主義列強の極東政策』¹¹⁾があるが、同書には前掲したような公刊外交文書集には収められていない、幾多の貴重な外交記録が引用されており、目をみはられた。1986年、ソ連をはじめて訪問した折、招待元の科学アカデミー幹部にも打診してみたが、レニングラードの史料館なら、手続きを事前にすれば閲覧可能だが、外務省文書館については、日本人の場合、現状ではきわめてむずかしいとの返事が帰ってきた。だが、ソヴィエト時代においても、保田孝一氏は周知のごとく、レニングラードの史料館ですぐれたお仕事をされていたし、また「西側」学者のなかにも、米国の日露関係研究者であるレンセン (George Alexander Lensen) 氏のように、外務省文書館所蔵外交文書の入手に成功した方もいた。「こちらは、ひつこい質なので、いずれ絶対みてやるぞ」と“捨て台詞?”を残して去ってほどなく、わが“呪い”が効いたか、ソ連では「ペレストロイカ」が

進み、史料の公開がはじまり、そのうちにソ連崩壊をむかえ、文書館は外国人学者に大幅に門戸を開けるようになった。しかし、モンゴル、中国での史料調査が進行中でもあったので、すぐにロシアへ出かける訳にもいかず、ようやく重い腰をあげたのは、1994年の春であった。一回目の調査(同年3～6月)は、複数の研究課題があり、また多くの研究機関、文書館、図書館で研究をおこなったが、もっとも長い時間を割いたのが、ロシア帝国期の東アジア関係、とくにモンゴル問題に関する外交文書の調査であった。

日本出発前、原暉之北海道大学スラブ研究センター教授から多々御教授をうけ、とくに外務省文書館(ロシア帝国期)の「ガイド/Путеводитель」のコピー¹²⁾をいただいて、予備知識をえた。さて意気揚々、モスクワへと赴いたのであるが、外務省文書館の場合、ほかの文書館とはことなり、ロシア学術機関の紹介状で、すぐに閲覧開始とはいかない。外務省歴史文書局(Историко-дипломатическое управление МИД)へ紹介状とともに、閲覧者本人の申請書を提出し審査をうけ、最短で10日ぐらいをへたのち、やっと許可書が下りる。もっとも、この申請手続きは、外国人の場合、出発前にロシアの招聘機関を通じておこなうことも可能である。

外務省文書館(ロシア帝国期)は、現在では正確には「ロシア帝国外交アルヒーフ/Архив внешней политики Российской империи、略称はАВПРИ」とよび、ソヴィエト期の外務省文書を保管する「ロシア連邦外交アルヒーフ/Архив внешней политики Российской федерации、略称はАВПРФ」とは建物も別で、モスクワ市内セルプホーフスカヤ通(ул. Серпуховская. 15)にある。表札も出ていないので、住所をよく調べて行かなければ、それとはわからない。同館のアーカイヴィスト(なぜかすべて女性)は、きわめて親切であるが、英語はまったく通じず(あたりまえである、ロシア語の文書をよみに行くのに、ロシア語が十分に話せない方がおかしいのだ!)、ロシア語でこちらがわからないと、フランス語で話してくれるのだが、こちらにはさらにわからない。ロシア語はよめたとしても、およそ会話などというものを習ったことさえない筆者が、無事なんとか仕事を終え、大量のコピーを携え帰国できたのは、筆者を受け入れてくださったソソツェフ科

学アカデミー言語学研究所長とミヤニコフ同極東研究所副所長、おふたりの科学アカデミー会員の御好意と、アーカイヴィスト諸姉の御親切、そしてコミュニケーションにまったく窮したとき、あれこれ手助けくださった閲覧者諸氏の御配慮のおかげである。

さて日本出発前にみることができた「ガイド」について、筆者はモスクワに行くまで、過去に文書館が出版したものを、米国の資料複製業者がマイクロ化したものとおもっていたが、実際にはもともとタイプ原稿であり、同館利用者のために製本され閲覧室に置かれているものであった。これを、文書史料をめぐる米・ロ共同事業が進むなかで、East View Publications 社がマイクロ化し発売したものである。この「ガイド」はよくできたものであり、これにより同館所蔵のロシア帝国期外交史料のおよその内容がわかる。ロシア帝国外交アルヒーフの所蔵史料は大別すれば、以下のごとき史資料群よりなる。ちなみに、ロシアのアルヒーフの専門用語について付言すれば、文書史料を表示するとき、まず各部門の分類である「fond番号/фонд no.」があり、つぎに「目録番号/опись no.」がつづき、そのあとに「案件ないしはファイル番号/дело no.」となり、最後に文書の葉数をしるす。現在の中華人民共和国の文書館(檔案館)の整理・分類基準は、ほぼソヴィエトのそれを導入したものであるが、「fond番号」は「全宗号」に、「目録番号」は「目録号」と、そして「ファイル番号」が「案巻号」に対応する。

(1) 外務処(あるいは外交参議会)/Коллегия иностранных дел. (1721-1832年); фонд No. 1~No. 132.

東アジア関係としては、このなかのfond番号 No. 62が、「ロシア・中国関係(1720-1805年)」で、目録は3種、496件のファイルからなる。fond番号 No. 98は、「日本問題(1739-1796年)」で、目録は1種のように、3件のファイルがあるようだ。このほかにも、中央アジア関係の史料としては、たとえばfond番号 No. 109には「ロシア・ブハラ関係(1714-1821年)」などがあり、目録は3種、134件のファイルがある。

(2) 外務省本省/Центральные учреждения Министерства иностранных дел России. (19世紀-20世紀初頭); фонд No. 133~No. 164.

東アジア関係部局文書としては、fond番号 No. 143が「中国課(1644-1917年)」(目録番号は491, 3438件のファイル)、fond番号 No. 143が「日本課(1824-1926年)」(目録番号は493, 2058件のファイル)、fond番号 No. 154が「アジア局(1813-1917年)」(目録は6種, 6524件のファイル)などがふくまれている。

(3) ロシアの在外外交機関/Заграничные учреждения внешнеполитической службы России. (18世紀末-20世紀初頭); фонд No. 165~No. 320.

このカテゴリーでは、「公使館、外交使節」、「領事館」、「外交代表」

表4: 東アジア関係ロシア在外外交機関文書の一覧

分類	fond番号	駐在地点	文書の年代	ファイル数	目録番号
公使館, 外交使節	188	駐北京外交使節	1689-1924	1599	761
	195	駐東京公使館	1870-1923	666	529
領事館	202	駐愛暉領事館	1908-1920	17	882
	229	駐香港領事館	1857-1920	756	776
	231	駐大連領事館	1908-1918	1	903
	239	駐広東領事館	1893-1920	124	780
	242	駐カシュガル領事館	1884-1916	28	630
	248	駐神戸領事館	1873-1875	3	552
	251	駐寛城子副領事館	1907-1909	5	595
	252	駐クルジャ領事館	1852-1903	33	889
	262	駐馬山浦副領事館	1899-1908	7	771
	267	駐ムクデン(奉天)領事館	1907-1919	40	558
	268	駐長崎領事館	1858-1925	769	559
	271	駐牛莊領事館	1899-1917	34	551
	283	駐ソウル領事館	1896-1931	378	766
	292	駐ウルガ領事館	1864-1923	30	732
	294	駐ウルムチ領事館	1896-1920	2	883
	298	駐釜山副領事館	1899-1923	53	769
	299	駐ハイラル副領事館	1913-1920	4	573
	300	駐函館領事館	1858-1908	71	572/2
301	駐ハルビン総領事館	1901-1920	320	818/1-2	
303	駐鎮南浦副領事館	1888-1906	7	772	
304	駐チチハル領事館	1901-1920	554	756, 757	
305	駐済物浦領事館	1897-1915	58	767	
306	駐慶興領事館	1907-1924	67	770	
307	駐チュクチャク領事館	1864-1874	2	887	
308	駐上海領事館	1913-1917	1	884	

の3区分があり、東アジア関係としては、以下の表4にみられる在在外交機関文書が保管されている。

(4) 外務省の臨時機関、各種委員会・団体、記録資料コレクション、個人およびそのほかの фонд/Временные учреждения МИД Российской империи, различные комиссии и общества, коллекции документальных материалов, личные и другие фонды.; фонд No. 321~No. 354。

このなかに、東アジア関係史料としては、 фонд番号 No. 326「極東総督外交官房文書(1899~1905年)」(目録番号は928, 34件のファイル)などがあるが、「記録資料コレクション」の方には、 фонд番号 No. 347として「『外務省通報』編集部」(目録番号は479, 27件のファイル)があり、また注目すべきものとして、 фонд番号 No. 350の「帝国主義時代の記録出版委員会文書」(目録は1種類, 982件のファイル)があるが、これは前記『帝国主義時代の国際関係』編集委員会の資料であり、「ガイド」注記によれば、未刊に終わった第2シリーズ21~24巻、第3シリーズ11~14巻の稿本が保管されているようである。

(5) 海外および国内アルヒーフ所蔵史料のマイクロ・コレクション/Коллекция микрофильмированных документов из иностранных и Российских архивов.; фонд番号はないが、目録は No. 1~No. 235。

表題よりわかるように、ロシア帝国期の外交に関係する、ロシア内外、公私の文書をマイクロで収集したもの。目録番号 No. 82(登録番号は439)は日本外務省記録のマイクロであり、5リール所蔵しているようである。外交史料のマイクロによるコレクションとしては、国際的にみても有数のものとおもわれる。

以上、総計すると、ロシア帝国外交アルヒーフ所蔵史料は、 фонд数が約400, ファイル数が50万件, ファイル書架を計算すると、約8キロに達するという。ともかく“物持ちのよさ”には圧倒されるどころである。

Ⅲ. ロシア帝国外務省中国課関係文書について

ロシア帝国外交アルヒーフの場合、上記「ガイド」をもとに、閲覧を希望する фондの目録を請求し、目録をくまなく目を通し、めざすファイルをさがすことから仕事ははじまる。はじめて訪問する文書館で、研究を開始するとき、とりわけこのロシア帝国外交アルヒーフのように膨大な史料をもつところでは、もっとも自分の研究テーマにとって有効な史料群はなにか、的確にねらいを定めることが重要である。筆者が、目下取り組んでいる研究課題は、前述のごとく、1910年代のモンゴル問題をめぐるロシアの外交行動であるので、まずロシア外務省本省で、清帝国および中華民国関係案件を所轄した部局である「中国課/Китайский стол」の文書を見ることとした。「中国課」の фонд番号(фонд no.)は143, 目録番号(опись no.)は491であり、前記「ガイド」によると3438件のファイルよりなるはずであった。出てきた「目録」(表紙タイトルは「中国課目録/Опись Китайского стола」)は、文字どおり保存台帳ともいべき体裁のものであり、同館指定用紙(?)にタイプを打ったところに、さらに手書きで修正・追加・書き込みをしてある。「中国課」文書の全容を紹介するために、目録のうえの大項目分類を要約すれば表5ようになる。もともとの記述は実にこまかく、年代などは、単純に上限と下限をひろったにすぎない。ファイルの総数は、「ガイド」の記述とは変動があり、「目録」上は表5記載のごとく、3505件のファイルがあるはずである。No. 1~No. 3389までは、「目録」作成時にタイプされたもの、No. 3390~No. 3488は追加別紙にタイプされたもの、そして No. 3489~No. 3505は手書きで記入されている。ただし検査の結果、欠けているファイル7件、空のファイル4件、合併したファイル19件、解体されたファイル23件、管理転出したファイル8件、そのほか不明1件、合計62件がはずれるので、1954年10月26日時点では、3426件あった。さらに、その後もファイルの再編・移管があり、62年10月20日には3439件、67年12月25日には3436件、85年12月19日に3438件となったのである。このような фонд文書のデータは、「目録」末尾にびっしりと、具体的なファイル名をあげながら、手書き

で記入されている。

表5：ロシア外務省中国課フォンド文書の概要

ファイル番号	文書取扱番号	収録年代	件名の大項目と原注
1~108	1~18	1883~1917	上奏文
109~141	1-K	1891~1917	北京駐在公使館文書
142~152	2-K	1866~1917	北京駐在帝国使節団
153~209	3-K	1861~1917	宗教使節および教会問題
210~240	4-K	1907~1917	駐ハルビン(総)領事館
241~248	5-K	1901~1917	駐ムクデン[奉天]領事館
249~265	6-K	1902~1917	駐チチハル領事館
266~284	7-K	1900~1917	駐吉林領事館
285~293	8-K	1907~1916	駐寛城子領事館
294~297	9-K	1907~1914	駐愛琿領事館
298	10-K	1914~1917	駐延吉庁領事館
299~300	11-K	1909~1917	駐ハイラル領事館
301~324	12-K	1875~1917	駐天津領事館
325~338	13-K	1899~1917	駐牛荘領事館
339~349	14-K	1894~1915	駐芝罘領事館
350~353	15-K	1906~1917	駐青島領事館
354~383	16-K	1868~1917	駐上海領事館
384~402	17-K	1883~1917	駐漢口領事館
403~405	18-K	1912~1917	駐広東領事館
406~414	19-K	1859~1917	駐香港領事館
415~425	20-K	1883~1911	駐福州領事館
426~443	21-K	1895~1917	駐ウルムチ領事館*1
444~474	22-K	1885~1915	駐クルジャ領事館
475~539	23-K	1886~1917	駐カシュガル領事館
540~561	24-K	1857~1917	駐チュクチャク[タルバガタイ]領事館
562~615	25-K	1867~1917	駐ウルガ領事館, 駐売買城副領事館
616~625	26-K	1891~1917	駐ウリヤスタイ領事館
626~637	27-K	1892~1917	駐コブド領事館
638~643	28-K	1909~1916	駐シャラスム領事館
644~673	29-K	1909~1916	自治モンゴル
674~682	30-K	1911~1916	モンゴル軍隊, ロシア人教官, 対モンゴル武器販売・供与
683~686	31-K	1912~1917	対モンゴル政府借款, モンゴル銀行, モンゴル政府財政顧問
687~712	32-K	1905~1917	鉄道, 郵便事業, モンゴルにおける電報
713~741	33-K	1876~1917	商工業, 鉱山採掘, 在モンゴル露人問題
742~754	34-K	1881~1916	モンゴルにおける個別案件, 個人案件 (原注: 35-Kの「モンゴル駐在外交代表文書」は未発見)

755~759	36-K	1911~1916	内モンゴル
760	37-K	1913~1914	バルガ
761	38-K	1726~1911	ウリヤンハイ地区
762	38-K	1895~1899	西北中国におけるドンガン[東干]蜂起
763~837	39-K	1899~1908	義和団運動および関連案件
838~851	40-K	1898~1916	中国の改革
852~862	41-K	1904~1915	中国の革命
863~867	42-K	1912~1916	中国の共和制
868~875	43-K	1892~1916	革命までの中国借款
876~899	44-K	1911~1917	ヨーロッパのシンジケートと善後借款
900~906	45-K	1905~1917	中国の工業・各省・鉄道借款, および関連利権, 工業借款の自由
907~924	46-K	1895~1915	露清[道勝]銀行
925~971	47-K	1898~1917	中東鉄道および関連案件
972~994	48-K	1903~1912	ハルビン問題および関連問題
995~999	49-K	1897~1917	国境守備隊, 関係案件
1000	50-K	1900~1917	国境守備隊諜報機関
1001~1009	51-K	1894~1915	紅鬃子
1010~1068	52-K	1884~1917	満洲における鉱山業
1069~1089	53-K	1858~1917	黒龍江, 松花江, ウスリー川航行
1090~1092	54-K	1904~1917	満洲における穀物問題
1093~1094	55-K	1911~1913	満洲における中国兵力の制限
1095~1098	56-K	1909~1912	錦州・愛琿鉄道
1099~1105	57-K	1895~1915	北満洲におけるロシア鉄道敷設
1106~1125	58-K	1897~1917	満洲関連個別案件
1126~1135	59-K	1905~1917	満洲におけるロシアと日本
1136~1139	60-K	1907~1914	南満鉄道および関連案件
1140~1144	61-K	1881~1917	露領極東地区
1145~1157	62-K	1889~1916	国境問題および国境紛争
1158~1167	63-K	1883~1917	国境当局および国境委員
1168~1187	64-K	1880~1917	国境区分*2
1189~1206	65-K	1866~1915	進境旅券, 保護証
1207~1215	66-K	1890~1917	在華貿易
1216~1231	67-K	1892~1917	在華貿易関係個別案件
1232~1267	68-K	1891~1914	在華個人商人問題
1268~1281	69-K	1886~1916	茶貿易
1282~1306	70-K	1869~1917	西部中国における貿易
1307~1309	71-K	1899~1914	チュルノム・イルトゥィシ川航行
1310~1314	72-K	1881~1911	1881年条約違反に関連した1911年の最後通牒行動
1315~1326	73-K	1889~1915	1881年条約の改定
1327~1343	74-K	1868~1916	在華税関問題
1344~1354	75-K	1906~1915	満洲の税関
1355~1396	76-K	1872~1917	ロシアの税関
1397~1411	77-K	1889~1916	家畜売買および獣医学

1412~1428	78-K	1868~1917	在華財政・貿易代表	2767~2777	114-K	1893~1917	ベテン師, 消息不明者, 失踪者, 品行不良分子 (原注: 追加 No. 3100 および No. 3311~3312 も参照)
1429~1447	79-K	1883~1917	キルギス人および異民族*3	2778~2868	115-K	1889~1917	死者
1448~1482	80-K	1900~1916	チベットとグライ・ラマ	2869~2878	116-K	1903~1915	日露戦争処理
1483~1576	81-K	1858~1917	在華列強	2879~2880	117-K	1892~1916	当部に対する決定および証明 (原注: 118-K はない)
1577~1590	82-K	1896~1917	在華日本人	2881~2961	118-K	1914~1917	1914年徴兵猶予
1591~1632	83-K	1881~1915	在華鉄道敷設	2962~2965	119-K	1907~1917	対国会
1633~1680	84-K	1887~1917	在華電信問題	2966~2969	101-K	1917	あらたな案件 (原注: No. 2966 は No. 3236へ移管, No. 2967 は No. 3241へ移管, No. 2968 は太平洋課へ移管, No. 3124 を移管。)
1681~1685	85-K	1875~1916	デンマークの権益	2970~2971			覚書
1686~1737	86-K	1882~1917	在華郵便事業	2972~3024		1904~1907	パヴロフ文書 (原注: No. 1905 「パヴロフ覚書」 参照)
1738~1742	87-K	1895~1903	中国個別河川の航行	3025~3032		1904~1912	パヴロフ文書付属外務省文書抄件 [?]
1743~1757	88-K	1909~1917	アヘン, ヘロイン, コカイン	3033~3040		1858~1861	イグナーチエフ使節
1758~1765	89-K	1887~1915	ペストおよびその他の疫病 (原注: 追加 No.3078を参照)	3041~3052		1833~1850	古い中国案件
1766~1777	90-K	1886~1915	中国軍事問題	3053		1895~1896	追加: 上奏文
1778~1798	91-K	1886~1917	在華露軍人の活動	3054		1913~1914	追加: 上奏文
1799~1830	92-K	1861~1917	護衛隊および戦闘部隊	3055	K.1	1917	北京公使館文書
1831~1849	93-K	1863~1915	海洋問題	3056~3057	K.2	1857~1902	北京駐在帝国使節団
	94-K		ロシア皇室 (原注: 追加 No. 3079~3084 を参照)	3058~3061	K.3	1893~1917	宗教使節および教会問題
1850~1944	95-K	1886~1917	第四政治部職員 (原注: 追加 No. 3085~3087 を参照)	3062~3063	K.4	1913~1917	駐ハルビン (総) 領事館
1945~1964	96-K	1887~1917	第四政治部物故・退職職員	3064	K.5	1902/1906	駐ムクデン [奉天] 領事館
1965~1975	97-K	1880~1917	ペトログラード駐在中国使節	3065	K.6	1917	駐チチハル領事館
1976~2001	98-K	1868~1917	中国皇室	3066	K.7	1917	駐吉林領事館
2002~2020	99-K	1886~1917	新領事館案	3067	K.20	1891	駐福州領事館
2021~2023	100-K	1872~1917	省通達	3068~3071	K.22	1912~1917	駐クルジャ領事館
	101-K		対国会 (原注: 追加 No. 2962~2965 を参照)	3072	K.24	1909	駐チュクチャク領事館
2024~2034	102-K	1882~1916	出版	3073~3074	K.25	1917	駐ウルガ領事館, 売買城副領事館
2035~2050	103-K	1872~1917	モンゴル, 中国におけるロシア学校	3075	K.27	1917	駐コブド領事館
2051~2057	104-K	1888~1917	暗号	3076~3080	K.28	1913~1917	駐シャラスム領事館
2058~2140	105-K	1886~1916	ロシア人へのロシア勲章授与	3081~3083	K.29	1911~1917	自治モンゴル
2141~2181	106-K	1896~1917	ロシア人への外国勲章授与	3084	K.30	1914~1917	モンゴル軍隊, ロシア人教官, 対モンゴル武器販売・供与
2182~2292	107-K	1872~1917	外国人へのロシア勲章授与	3085~3093	K.31	1913~1917	対モンゴル政府借款, モンゴル銀行, モンゴル政府財政顧問
2293~2335	108-K	1881~1917	一般訴訟	3094~3098	K.32	1913~1917	鉄道, 郵便事業, モンゴルにおける電報
2336~2438	109-K	1878~1916	個別訴訟案件	3099~3102	K.33	1913~1917	商工業, 鉱山採掘, 在モンゴル露人問題
2439~2502	110-K	1894~1917	元老院移管訴訟案件	3103~3104	K.34	1907~1916	モンゴルにおける個別案件, 個別案件
2503~2663	111-K	1894~1917	在華露人個人医療問題 (原注: No. 3294~3302 も参照)	3105~3106	K.36	1914~1917	内モンゴル
2664~2689	112-K	1889~1917	在シベリア・中国外国人個人医療問題 (原注: No. 3303~3309 も参照)	3107	K.37	1917	バルガ
2690~2766	113-K	1882~1917	在露あるいはロシア関係中国人個別案件 (原注: No. 3310 を参照)	3108~3116	K.38	1904~1917	ウリヤンハイ地区

3117~3123	K.39	1891~1903	義和団運動および関連問題
3124~3127	K.41	1911~1917	中国の革命
3128~3130	K.42	1912~1916	中国の共和制
3131~3132	K.44	1916~1917	ヨーロッパのシンジケートと善後借款
3133~3134	K.45	1895~1898	中国の工業・各省・鉄道借款, および関連 利権, 工業借款の自由
3135~3140	K.46	1895~1916	露清 [道勝] 銀行 (原注: No. 3137~3161, 外務人民委員会より)
3141~3161	K.47	1895~1918	中東鉄道および関連問題
3162	K.50	1910~1917	国境守備隊諜報機関
3163	K.51	1916~1917	紅鬃子
3164	K.52	1901~1903	満洲における鉱山業
3165	K.53	1916	黒龍江, 松花江, ウスリー川航行
3166~3169	K.56		錦州・愛琿鉄道
3170~3071	K.58	1901~1908	満洲関連個別案件
3172~3175	K.59	1903~1912	満洲におけるロシアと日本
3176	K.60	1917	南満鉄道および関連案件
3177~3181	K.61	1913~1917	露領極東地区
3182~3183	K.62	1889~1903	国境問題および国境紛争
3184	K.63	1868~1916	国境当局および国境委員
3185~3195	K.64	1869~1917	国境区分
3196~3197	K.65	1915~1917	進境旅券, 保護証
3198~3200	K.66	1891~1910	在華貿易
3201~3210	K.67	1898~1916	在華貿易関係個別案件
3211	K.69	1917	茶貿易
3212	K.70	1887~1890	西部中国における貿易
3213~3215	K.74	1907~1915	在華税関問題
3216~3217	K.76	1910~1917	ロシアの税関
3218~3219	K.77	1915~1917	家畜売買および獣医学
3220~3224	K.79	1883~1917	キルギス人および異民族
3225~3237	K.81	1898~1917	在華列強
3238~3239	K.82	1912~1917	在華日本人
3240~3241	K.83	1910~1917	在華鉄道敷設
3242~3245	K.84	1875~1914	在華電信問題
3246~3247	K.86	1897~1917	在華郵便事業
3248~3249	K.89	1894~1911	ペストおよびその他の疫病
3250~3253	K.91	1913~1917	在華露軍人の活動
3254~3259	K.94	1888~1901	ロシア皇室
3260~3273	K.95	1907~1917	第四政治部職員
3274~3276	K.98	1909~1917	中国皇室
3277	K.102	1911	出版
3278~3281	K.106	1901~1916	ロシア人への外国勲章授与
3282~3288	K.107	1895~1913	外国人へのロシア勲章授与
3289~3291	K.108	1911~1917	一般訴訟
3292~3293	K.109	1907~1908	個別訴訟案件

3294~3302	K.111	1902~1917	在華露人個人医療問題
3303~3309	K.112	1904~1916	在シベリア・中国外国人個人医療問題
3310	K.113	1916	在露あるいはロシア関係中国人個別案件
3311~3312	K.114	1910~1917	ベテネ師, 消息不明者, 失踪者, 品行不良 分子
3313~3317	K.116	1905~1912	日露戦争処理
3318~3322	K.118	1821~1917	アルヒーフへの引渡し
3323~3357		1914~1917	「戦争」文書
3358~3505		1842~1917	追加

*1 No. 443までは業数の記載あり, 以下なし

*2 1188はない

*3 原文は“инородцы”で革命前には, おもにロシア東部に居住していた非ロシア人の公称

表6: ロシア外務省中国課フォンドの日露戦争関係上奏文一覧

ファイル番号	文書取扱番号	収録年代	業数
52	10	1903~1904.I.	289
53	10c	1904.II.	440
54	10c	1904.III.	283
55	10c	1904.IV.	266
56	10c	1904.V.	203
57	10	1904.VI.	165
58	10	1904.VII.	373
59	10e	1904.VIII.	264
60	10e	1904.IX.	185
61	10	1904.X.	345
62	10	1904.XI.	300
63	10	1904.XII.	280
64	10	1905.I~II.	271
65	11a	1905.III.	182(192?)
66	11a	1905.IV.	172
67	11a	1905.V.	154
68	11a	1905.VI.	172
69	11	1905.VII.	125
70	11	1905.VIII.	246

この『目録』をより詳しく検討すると, No. 1~No. 108の上奏文のうち, No. 1~No. 17つまり1883年から1898年までの時期は, 年次別である。ただし1895年に関しては, No. 3053にある。No. 18以降, 1898年か

らあとは、地域別、案件別に分類されている。ただし No. 1~No. 102 までが主要部分で、No. 103~No. 108は寄せ集めである。たとえば、No. 52~No. 70は日露戦争関係上奏文であり、表6のような内容となる。

また、地域としては、No. 47 (1903年), No. 51 (1904年), No. 79 (1905年), No. 85 (1906年) がチベット関係上奏, No. 78 (1905年), No. 100a~b (1912~1913年) がモンゴル関係上奏である。

表5からわかるように、上奏文につづいて、No. 109~No. 643までは、公館別分類である。つぎに事案別分類の例として、No. 852~No. 862の「中国の革命」(表7) および No. 644~No. 673「自治モンゴル」(表8) をあげる。

表7：ロシア外務省中国課フォンド「中国の革命」項目の文書一覧

ファイル番号	文書取扱番号	収録年代	件名
852	41-K	1904~(1910?)	中国の秘密結社「Ан-го-ху」および中国高官「Ван-Чэш-дунз」暗殺未遂事件, 革命運動
853	〃	1910~1911	長沙, 漢口, 武昌, 天津の騒乱
854	〃	1911	中国の騒乱
855	〃	1912	中国の騒乱
856	〃	1912	中国の騒乱
857	〃	1912	中国の騒乱
858	〃	1913	中国の騒乱
859	〃	1913	中国の騒乱
860	〃	1914~1915	1914, 15年の中国革命運動
861	〃	[記載なし]	中国革命関連クロボトキン案
862	〃	1911~1912	中国革命 Varia [原文ママ]

表8：ロシア外務省中国課フォンド「自治モンゴル」項目の文書一覧

ファイル番号	文書取扱番号	収録年代	件名
644	29-K	1909 1910 1911	1. 中国への抵抗運動の開始 2. アンバン・サンド [庫倫辦事大臣三多] との闘争 3. ダー・ラマとカンダドルジ [ハンダドルジ] の代表団

			4. モンゴル独立宣言 (I)・(II)
645	29-K	1912.I.~II.	モンゴルの独立 (III)
646	29-K	1912.III.~V.	モンゴルの独立 (IV)
647	29-K	1912.VI.~VIII.	モンゴルの独立 (V)
648	29-K	1912.IX.~X.	モンゴルの独立 (VI)
649	29-K	1912.XI.~XII.	モンゴルの独立 (VII)
650	29-K	1913.I.	モンゴルの独立 (VIII)
651	29-K	1913.II.	モンゴルの独立 (IX)
652	29-K	1913.III.	モンゴルの独立
653	29-K	1913.IV.	モンゴルの独立
654	29-K	1913.V.~VII.	自治モンゴル
655	29-K	1913.VIII.~IX.	自治モンゴル
656	29-K	1913.X.~XII.	自治モンゴル/露中協定
657	29-K	1914.	自治モンゴル
658	29-K	1912.VIII.~X.	ハルハとの協定 (I)
659	29-K	1912.XI.~XII.	ハルハとの協定および中国, モンゴルとの交渉 (II)
660	29-K	1913.I.~V.	ハルハとの条約, およびハルハに関する中国との条約 (III)
661	29-K	1913.VI.~X.	ハルハとの条約 (IV)
662	29-K	1912~1914	三者交渉/準備段階/ (I)
663	29-K	1914	三者交渉 (II)
664	29-K	1913~1915	三者交渉 (III)
665	29-K	1915.III.~1916.VII.	三者交渉 (IV)
666	29-K	1911~1912	キャフタ売買城におけるモンゴルの独立宣言と関連した騒動
667	29-K	1912~1913	露蒙, および露中協定の個別例
668	29-K	1913~1914	日本人の訪問者コダマ [「児玉利正」] とモンゴル政府との協定, ホトクトからの日本天皇宛て書簡
669	29-K	1915	モンゴル僧団に関する状況
670	29-K	1915	外モンゴルにおけるチベット人の状況
671	29-K	1916	外モンゴルの中国殖民について
672	29-K	1912	モンゴル交渉に関するオレンジ・ブックに利用された資料
673	29-K	1914	モンゴル問題Varia [原文ママ]

このように、中国課フォンドのなかに多数あるモンゴル関係ファイルのうち、「自治モンゴル」の項目に分類されているものだけで、30ファイルある。各ファイルの厚さはそれぞれさまざまであるが、640番台はおおむね、1ファイルが500葉弱(「葉」とは、ヨーロッパ式アーカイヴ

ズ分類の方式で、原則として文書右上に鉛筆でローマ数字番号を打つ。裏面には番号は付されない。)程度であった。ちなみに、No. 668のファイルこそ、筆者が、いまを去ること十数年前、大学院時代に、『帝国主義時代の国際関係』と中央研究院近代史研究所所蔵中国外交部文書、それに日本外務省記録にもとづき書いた、自称「児玉利正」こと「大立亀吉?」なる奇妙な日本人のモンゴル訪問、そしてそれに端を発する天皇宛てボグド・ハーン親書のロシア側原記録であった¹³⁾。モンゴル問題の進展を刻々伝えるロシア外交官の電報、出版された外交文書集では採録されていない、ロシアのモンゴル政策決定過程できわめて重要な意味をもつ省庁間会議の議事録、モンゴル代表団がペテルブルグで提出したモンゴル文覚書、日本では「満蒙独立運動」の参加者といわれるバボージャブに関する文書(このなかには、かれが撒いた「清朝復興」を唱える漢文布告もふくまれていた)、ともかく、出てくるわ、出てくるわ、毎日興奮・感激の連続であった。

外交文書には、その国家・国民の世界へのアプローチの仕方、さらにいえば「世界認識」ともいうべき観点が投影されている。日本の戦前期外務省記録をみれば、その中核をなすのが「満蒙問題」あるいは「支那問題」と当時よばれた案件に関するファイルであり、さらに「対英」・「対米」案件がつづく。ロシア帝国の東アジア外交についていえば、一方に日本という巨大な存在があり¹⁴⁾、それとは別に中国へのアプローチは、地理上からみて当然なのだが、つねにモンゴル、中国東北、東トルキスタン、チベットといった周縁地域を通じてなされている。したがってこれらの地域関係史料が東アジア関連文書のなかで占める割合は、すこぶる大きいのである。

IV. あとがき

「九牛の一毛」ということばがあるが、いままで筆者がみたロシア外交史料は、ロシア帝国期の東アジア外交、そのなかのモンゴル問題を中心とした国際関係に関するファイルのうちでも一部である。なによりも文書史料にとらめっこをしながら、毎日嘆いたことは、わが身のロシア語能力の貧弱さである。タイプ打ち文書はよめるが、手書きの起案原稿、

メモにいたっては、よほど正確な楷書で書かれたものは別として、お手あげであった。もっとも、この種の経験はいまにはじまったことではない。むかし、はじめて台湾で清朝軍機処文書にあたったとき、こんなものはたしてよめるかと絶望した。また中国人アーカイヴィストのいうことはさっぱりわからなかった。筆者はつねに楽観的である。牛歩のあゆみであろうと、いずれなんとかロシア語史料をより縦横に利用できる段階までたどりつきたい。また単によむ力、はなす力だけの問題ではない。文書をよみ解くためには、外務省の機構に対する理解は肝要であるし、また外交文書学ともいべき知識、つまり文書の形式と流れなど、知識のあるロシア外交史家なら知っていることを、なにひとつとして知らない。ついでながら、ことロシア帝国外交アルヒーフには、参考図書が閲覧室に備えつけてあるといったことはない。文書をよみながら、これは『帝国主義時代の国際関係』に採録されていた文書のおもいながらも、参照すべき術もない。日本出発前に関連部分のコピーをもって行こうかと一度は考えたが、あまりの量の多さにあきらめたのだった。案の定、ロシアではこの種のサービスは欠けていた。結局、日曜には開いているロシア国立図書館で『帝国主義時代の国際関係』を請求し、約1時間待って手にいれ、対照しメモを作った。これから行かれる方にお勧めしたいのは、日本出発前に、できるかぎり刊行されている文書集に目を通しメモを作っておかれることである。うまく既刊文書集を使えば、史料閲覧のスピード・アップもはかれるとおもう。またファイルを請求しても、通例2日後にやっと現物は出てくる。これはサービスの悪さという以上に、所蔵史料の多さと人員不足のためだろう¹⁵⁾。

いまでも、これからよまねばならない、膨大な史料の量におもいおよぶと、溜め息が出る。しかしまたいつ行こうかとつねにおもいめぐるのは、史料にこめられた情報量の価値の高さと、それを使いあらたな歴史像をえがくことへの期待からである。ともあれ、なんとか仕事ができたのは、内外の友人の適切なアドバイスと御親切な援助のおかげである。ここから御礼申しあげたい。

註

- 1) Toscano, Mario, *The History of Treaties and International Politics*, I, (Baltimore : the John Hopkins Press, 1966).
- 2) 佐々木揚「近代露清関係史の研究について——日清戦争期を中心として」『近代中国』第5巻(昭和54年4月), 57~82頁。
- 3) 江口朴郎「ソ連邦における外交資料公表の意義」『スラブ研究』第3号(1959年), 1頁。
- 4) Чиркова, Е. А., “Источники по истории внешней политики России и международных отношений на старницах журнала «Известия Министерства иностранных дел» (1912—1917 гг.)”, *Внешняя политика России (Историография)* (Москва : Наука, 1988), стр. 278-290.
- 5) 佐々木揚編訳「19世紀末におけるロシアと中国『クラスヌイ・アルヒーフ』所収史料より」『東アジア史資料叢刊第1輯』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所および巖南堂書店, 平成5年), 3頁。
- 6) “Царская Россия и Монголия”, *Красный архив* 6 [37] (1929), стр. 3-68.
- 7) 三宅正樹「ロシア外務省文書集とポクロフスキー独訳版と邦訳版をめぐる考察」『神奈川大学人文研究所報』第5号(昭和47年), 73~114頁。
- 8) Quested, Rosemary, “Further Light on the Expansion of Russia in East Asia : 1792 - 1860”, *The Journal of Asian Studies*, Vol. XXIX, No. 2 (February 1970), pp. 341-343.
- 9) たとえば入江啓四郎「辛亥革命と新政府の承認」『神川先生還暦記念近代日本外交史の研究』(有斐閣, 昭和31年), 231~294頁を参照。
- 10) ロシアの文書館案内としては, *Государственные архивы СССР, справочник*, 1 и 2 (Москва : Мысль, 1989). があるが, すでに現状にあわない。Grimsted, Patricia K. ed., *Archives in Russia, 1992 : A Brief Directory, Part 1, Moscow and St. Petersburg* (Moscow-Princeton, 1992) なる “Preliminary English Draft” があり, 関係者に配布されているが, これは最新の情報をとりいれて, 便利である。
- 11) Григорцевич, С. С., *Дальневосточное политика империалистических держав в 1906-1917 гг.* (Томск : Издательство Томского университета, 1965).
- 12) この「ガイド」は, 以下の6部分よりなる。
 - ① *Путеводитель по фондам Архива внешней политики Российской империи* (Москва: Министерство иностранных дел Российской федерации, 1992).
 - ② *Путеводитель по фондам Архива внешней политики России, часть*

- I, *Коллегия иностранных дел* (1721-1832 гг.) (Москва : Историко-дипломатическое управление МИД СССР, 1988).
- ③ *Путеводитель по фондам Архива внешней политики России, часть II, Центральные учреждения Министерства иностранных дел России*, (Москва : Историко-дипломатическое управление МИД СССР, 1989).
- ④ *Путеводитель по фондам Архива внешней политики России, часть III, Заграничные учреждения внешнеполитической службы России* (Москва : Историко-дипломатическое управление МИД СССР, 1989).
- ⑤ *Путеводитель по фондам Архива внешней политики России, часть IV, Временные учреждения МИД Российской империи, различные комиссии и общества, коллекции документальных материалов, личные и другие фонды* (Москва : Историко-дипломатическое управление МИД СССР, 1992).
- ⑥ *Путеводитель по фондам Архива внешней политики России, часть V, Коллекция микрофильмированных документов из иностранных и Российских архивов* (Москва : Историко-дипломатическое управление МИД СССР, 1992).
- 13) 「ボグド・ハーン政権の対外交渉努力と帝国主義列強」『アジア・アフリカ言語文化研究』第17号(1979年3月), 1~58頁。
- 14) 日本関係文書の一部もみたが, 本稿では紙数の関係でふれない。「日本課」所轄文書に関していえば, 日本のみならず, 朝鮮, シヤムなどの関係文書もふくまれる。ロシア・ソ連外交文書のなかの日本関係文書については, 近く稲葉千晴氏が, ロシア人研究者の助力をえて作成した目録が刊行されるはずである。なおロシア帝国外交アルヒーフでは, 日本人研究者と出会うことはついぞなかったが, 韓国(朝鮮)系研究者の進出はめざましい。たとえば, 筆者がほぼ毎日アルヒーフで顔を合せた, ソウルより6年前来たというバク・チョンヒョ氏は, まずロシア語を学習することからはじめ, ついでアルヒーフに通い, おもに日本課文書にもとづき, 日清戦争以後の露朝関係をまとめ, つぎの本を出版している。Пак Чон Хё, *Россия и Корея, 1895-1898*. (Москва : Московский гос. университет им. М. В. Ломоносова, 1993).
- 15) 「ロシアのアルヒーフを訪ねて」, 伊藤隆主宰『近代日本研究通信』No. 22 (平成6年8月25日), 67頁。

(追記)

本稿を提出したあと, またロシアへ出張することとなった。今回の訪

問で知りえた情報を付記する。モスクワでは、ティフヴィンスキー、ミヤスニコフ両科学アカデミー会員とお会いしたが、『19世紀および20世紀初頭のロシアの対外政策』についておたずねすると、ロシア連邦外務省としては、継続刊行の意思はあるとのことであった。とくに外務大臣が、プリマコフに交替したこともあり、前任者のコズィーレフにくらべ、学界出身でもあり、はるかにこの種のことに理解があるので、いずれ再開されるであろうとの回答であった。なおミヤスニコフ博士よりは、御自身が編集責任者である、最近刊の『19世紀の露中関係』第1冊を恵みいただいた。文中でもふれた、『ロシア・中国関係史料集』シリーズの継続であるが、1020頁におよぶ大冊であり、536件の文書を収録している。注目すべきはロシア国内の文書館史料のみならず、モンゴル国立歴史中央アルヒーフ所蔵の庫倫辦事大臣衙門文書からも、関係文書が収められていることである。一般に、『ロシア・中国関係史料集』は18世紀で完結し、以降の時期については、『19世および20世紀初頭のロシアの対外政策』に役割を譲るとの憶測があったが、これは完全なまちがえである。予定によれば19世紀は全5冊になり、さらに20世紀の露中関係外交文書も刊行することのことであった。今回のロシアにおける史料調査の目的は、サンクト・ペテルブルグのロシア国立歴史アルヒーフで閣僚会議文書を見ることにあった。詳細は略すが、同館からは以前、大部な、しかしいささか使いにくい『所蔵史料概要』が出ていたが、昨年、アメリカの援助により、より使いやすい『所蔵文書フォンド概要』が出版されていた。ロシアのアルヒーフ所蔵文書史料に対する、アメリカ学界の熱意と関心は、このようなところにも現れている。

最後に数次にわたるわたくしの調査に援助いただいた、国際交流基金および文部省当局に厚く御礼申しあげたい。また幾つかの訳語の問題で、原暉之、横手慎二両教授から、御教示をうけた。御礼申しあげることである。